

施設栽培イチゴの ヒラズハナアザミウマに対する薬剤の殺虫効果



写真1 イチゴの花に群がるヒラズハナアザミウマ



写真2 イチゴの被害（果実の褐変）

表 ヒラズハナアザミウマ幼虫に対する各種薬剤の殺虫効果（補正死虫率・％）

供試薬剤	希釈倍数	採集地および採集年								
		高知市1	高知市2	高知市3	高知市4	須崎市1	須崎市2	中土佐町1	中土佐町2	黒潮町1
		2011年	2012年	2012年	2012年	2011年	2011年	2010年	2012年	2012年
アーデント水和剤	1,000	67	100	100	100	71	38	98	29	100
アフーム乳剤	2,000	76	79	83	64	61	55	100	74	96
コテツフロアブル	2,000	77	81	70	81	21	28	100	80	100
スピノエース顆粒水和剤	5,000	81	86	96	93	54	14	88	36	100
ディアナSC	2,500	—	—	96	88	—	32	—	42	100
モスピラン水溶剤	2,000	9	55	32	18	19	31	18	58	58

注）数値が大きいほど薬剤の効果が高いことを示す。—は未調査。

ヒラズハナアザミウマは、イチゴ果実の褐変や着色不良などの品質低下を引き起こす害虫です（写真1、2）。近年、県内の施設栽培イチゴでは、本種の防除に用いられてきた薬剤が効きづらくなっているという声が出てきました。

そこで、県内各地から採集したヒラズハナアザミウマ9個体群に対する主要6薬剤の殺虫効果を調査しました。

その結果、アーデント水和剤は半分以上の個体群で補正死虫率98%以上と今回の供試薬剤の中では高い殺虫効果を示しました。しかし、中土佐町2のように補正死虫率29%と防除効果の期待できない個体群も認めら

れました。アフーム乳剤、コテツフロアブル、スピノエース顆粒水和剤は殺虫効果の低い個体群が多く見られました。また、モスピラン水溶剤は全ての個体群で補正死虫率60%未満と殺虫効果が低くなりました。なお、新規登録薬剤のディアナSCは補正死虫率32~100%と殺虫効果が不安定でした。

以上のように安定した殺虫効果が得られる薬剤の無い現状では、薬剤のみによる防除は困難と考えられます。このため、当センターでは天敵の利用を含めた総合的防除法についての研究を進めています。

（昆虫担当 安達鉄矢 088-863-4915）